

夏季福音特別集会 第1回集会

あなたにとってキリストは如何なる存在か

2018年8月24日（京都KKRくに荘）

キリスト道の神髄 終末の迫り キリストは私に何を求めていらっしやるのか 終末性 キリストの中に神の国がある 伝道の使命と実践 我は火を地に投ぜんとて来たれり 聖霊の熱血漢 霊性 主は私にこれを望んでおられる 祈り

●キリスト道の神髄

特別集会を本日から二泊三日で行いますが、皆さんにあらかじめご案内したところに盛り込めなかったかもしれませんけれども、ご案内の中では、

《主題：「十字架・聖霊」の貫徹——キリスト道の神髄——》
といたしました。そして、その内容を、次の三つのレベル（局面）において明確化したいと考えています。

（Ⅰ）個人のレベルで：十字架と聖霊による「新生」の必要性（各人が、「信仰面で他人に依存するのではなく、真に自律した「キリスト直結」の生き方をする事）

内容を三つのレベルで明確化したい。一つは、「個人レベルで、十字架と聖霊による新生の必要性」です。ということは、各人が信仰の面で他人に依存するのではなくて、真に自律したキリスト直結の生き方をしてほしいということがまず書いてあります。

これはどういうことを言っているのかというと、我々この京都キリスト召団——小池先生が始めた「キリスト召団」ですけれども——それはいわゆる教会制度の上に成り立っていない。教会制度というのは、ちゃんと牧師さんを養成する組織ができあがっている。一般の信者の方は献金で牧師さんを支える。その牧師さんは、牧師養成学校で養成されて、それぞれの部署に赴任していくというシステムなんです。我々は全然そうではない。素人がやっている。この世的には何の資格も貰っていない。キリストから直接、

「おまえ、やれ。私がおまえを助けるから、やれ」

「はい、わかりました」

と。それだけなんです。その気魄をわかっていただきたい。特別集会は、「何かいいことがあるかもしれない。みんなに会えるし、うれしいな」

と、そんなものではない。もちろん、皆さんはそんな思いでは来ていらっしやらないと思います。一人びとりが自分のいだいているものを出し合うという、それなんです。献金は皆さん出されます、目に見える形で。それ以上に自分が一年間養われてきた、主と共に歩んできた、そこで得た何かをここに持ち寄って、皆さんを互いに支え合い、助け合って、



そしてよりいつそう飛躍した姿でまた一年、散っていつてそれぞれの所で働こうではないかと。そういう気持ちで私はいる。それをわかっていただけですかね。

自分の個人の幸福ということではない。自分なんかどうだっていい。キリストだけなんです、私にとっては。キリストが願ってくださる通りにありたい。私はもう真剣なんです、本当のところ。

「終末の迫りの中で」と書きました。明日にも終わりが来るかもしれない。現に東北の大震災であれだけたくさんの方が犠牲になりました。善人も悪人も、信仰があろうがなからうが、関係なかったですよ、まるでノアの洪水みたいに。

私たちの人生、生というものは賜りたるものであり、

「神与え、神取りたもう。主なる我らの神は讃むべきかな」

とヨブ記に出てきます。そういうふうには、自分のものなんて一つもない。みんな賜りたるものです。賜る前提は十字架なんです。キリストが生命を賭けて、十字架で死んでくださって、そして私たち罪びと、地獄必定の身に新しい生命を、御霊の生命をくださって、

「さあ今度は、おまえは神の民として世のために働け」

「はい、わかりました。献げてまいります」

と。そういう関係なんですよ、私はキリストとの間は。それで今日は、

「あなたは、私(イエス・キリスト)を誰と言うか？」

あなたにとって、私は如何なる存在か、どこに接点があるか？」

と、こんな長つたらしい問題は今までなかったと思いますけれども、あなたにとってキリストは如何なる存在か。本気であなたにとってキリストは如何なる存在ですかと。

あなたを幸せにしてくれる存在なんですか。自分の幸せのためにキリストを求めたら、それはキリストを召使にしている。キリストを手段にしているんです。そんなものではないと、私は思っている。

キリストは生命を賭けてくださった。しかも神の御意に従ってなんです。キリストは祈っておられたら、もう眩まぼゆくなつて、そのまま天に昇つていかれるお方ですよ。あの山上の変貌でハッキリしてます。そして、そのまま行つてしまわれたら、我々はもう全く神さまの世界、神の次元とは絶縁状態で終わってしまう。それをキリストは、ご自分はそのまま栄化して天に昇るところを、よりによって我々くだらんやつのためにご自分の生命いのちを献げてくださった。生命を賭けてくださった。その方に我々は応えらるとしたら、生命を賭けて応えるしかないじゃないですか。しかし、人間の力ではできません。だから、

「御霊みたまをください！ 御霊みたまよ降りて私を燃やして、あなたの戦い人として用いてく

ださい」

これが我々の願い、祈りではないですか。

人間の幸せのために神を求めらるなら、そこらにいくらでもある、日本人の宗教はみなそ



れです。幸せ、宗教なんです。しかも、だいたい分業です。学問なら菅原道真さん。安産だつたら出雲いずもに行きなさいとか、分業態勢が成り立っています。伏見ふしみ稲荷いなりは何かお金が儲かるんですかね。一週間、銀行員が一生懸命になってお金を勘定しているみたいなきことをよく聞きます。そんなもんじゃありません。我々は主イエス・キリスト。このお方が生命を賭けてくださった。

「おまえはこれで生きろ。それが私の願いである。本願である」

「はい、ありがとうございます」

と。それ以外に何かあるんですか。

●終末の迫り

私はもう生き先が短いですから、終末の迫りを感じるんです。皆さんは感じませんか。

「いつ終わりが来てもいい」

という生き方をしないとダメです。福音というのはそういう中で語られた。終末の迫りの中で福音は語られたんですよ。

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」

と、キリストの伝道の第一声はそれでしょ。「時は満ちた」と。審判の時、終わりの時なんです。それが近づいた。その時にキリスト・イエスという方が現れた。時が満ちて現れて来てくださった。

「もうあとそんなにゆとりはないよ、終末は迫っているよ」

と。バプテスマのヨハネもそうだった。烈しいことを言ったでしょ。

「悪いことをしたやつは悔い改めろ。みなから無理やりに取りたてたものは全部返してやれ。へんな事をしたやつはみな自分でできるかぎりやれ。そのうえでバプテスマを受けろ。あとから来られる方は火でもってバプテスマを施される」

と。もう凄い、脅迫ですよ、ヨハネの宣教は。だから、みんなぞくぞくとバプテスマを受けた。そしたら、ヒョッコヒョッコ来たお方がイエス・キリストです。

「私も受けさせてもらいたい」

「とんでもない。私があなただからバプテスマをしていたただかなければならない身なの

のに、イエスキさま、あなたにバプテスマなんかとんでもない」

「いや、私は特別な人間ではないよ。私も受けさせてほしい」

とキリストは言われた。

これを気づかせてくれたのが小池先生なんです。イエスがヨルダンでバプテスマを受けられた。そこに既にイエスの凄さが表れている。自分を何ものとも思っていない。自分は善人だとも、神の前に義ただしいとも思っていない。

「私も同じだよ」



と。そのようにしてヨルダンに身を浸された。ヨルダン河というのはなにか地球の中で一番低い所を流れている、と聞いたことがある。つまり、一番どん底に身を置いた、身を沈めた。そして、

「水から上がって祈っておられたら、天が開けて聖霊が鳩の如く降ってきた」とあるでしょ。しかも声があった、

「おまえこそ、私の喜ぶ者だ。おまえこそ私の心にかなう者だ」

ということとは、今までおまえのような者は出てこなかったということ。父の御意、神の御意とピタッと一つになっている。

それでめでたしめでたしではなかった。それから御霊に導かれて、四十日四十夜、荒野で試みに遭われます。それであのサタンとの戦いです。四十日四十夜というのは凄いですよ。それこそもう骨皮筋衛門、お腹も背中もペツタンコにひつついてしまう。そういう時にサタンが出てきて、

「おまえは神の子だったら、神の力で石ころをパンに変えてごらん。お前も腹がへっただろう。けれども、民衆は喜ぶよ、パン問題は解決だと喜ぶよ」

と。それに対してキリストは、

「人が生きるのはパンのみによるにあらず。神の口から出るひとつひとつの

言ことばで生きる」

と。これは申命記に出てくる。申命記では、出エジプト記をくりかえし詳しく書いてある。マナが生えてくる。それで養われる。またある時は、ウズラが飛んでくる。出エジプトした民が、もう三日間食べ物がなかったら、ブーブー言うものだから、それでモーセが執り成して、マナが与えられたりウズラが飛んできたりと、そういうことが出てます。いかに人間というものはエゴイストかということなんです。どんなに恵みにあずかって、三日辛いことがあつたら、もうコロツと忘れてしまう。

「エジプトはよかった、エジプトに戻りたい」

と。彼らは特別悪いやつなのか。いや、これ万人共通です。人間というのはそのくらいエゴイストなんです。

「自分に役に立つ神さまなら信じます、役に立たない神なんか要りません」

と。これではないですか。よその民族は知りません。日本人はそうだと思う。

でも、キリストというお方は違いました。神さまだけなんです。神さまの御意がすべてです。それが義ただしいか義しくないか、そんなことは考えておられない。

「神さま、あなたの御意みこころがすべてです。それをどうぞこの身を通して現してく

ださい」

と。だから、キリストほどの孝行息子はいないと、私は思う。自分が判断して、義しいか義しくないか、ではない。



「あなたの御意が義しいんです。あなたの御意に従っていくのが義です」といつて自分を委ねていかれた。もちろん、結果はただしいですよ、素晴らしいですよ。けれども、ただしいからどうこうではない。

「あなたの御意だから、それに自分はお委ねします」ということ。私はそう受けとっている。

●キリストは私に何を求めていらっしやるのか

皆さんにとってキリストはどういうお方ですか。幸せを持ってきてくれるから信じるんですか。困った時に祈れば助けてくれるから信じるんですか。私はそんなのはいやですね。

「あなたの御意がこの身を貫いてください。私は十字架であなたと一緒に死にました。『われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず』と、これを貫きたいんです、私は」

と。だから、こんなことを言ったら、普通の人は信仰の道に入ってきてませんよ。

「なんだ、信仰して幸せになると思っているのに、あなたの言うことは目茶苦茶やないか。そんな神さまはいらんわ」

「ああ結構ですよ」

と。皆さんはどうなんですか。本気で、

「キリストのためなら自分の命なんかどうでもいい。私は主と共に死にました。われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず。今、肉体にあつて私が生きているのは、私のために十字架に私の代わりに死んでくださったそのお方を信じて、そして生きているんです」

と。ガラテヤ書2章20節、21節。そうでしょ。

だから、私が申し上げたいのは、自分からスタートして「信仰とは何ぞや」ではなく、キリストに頼られてくださった神さま、ということ。キリストのみ思いが何であるか、これだけが私にとっては決定的に大事なんです。キリストはどう思っているのか、キリストは私に何を求めていらっしやるのか。今日の題は、

「あなたにとってはキリストは如何なる存在か」

と、やさしく聞いていますけれども。皆さんお一人お一人、自分の胸に手を当てて、「あなたにとってキリストはどういうお方なんですか」と。もちろん、

「十字架にかかつて罪を全部贖つてくださって、生命をくださった有難いお方です」と。それはもちろんその通りです。

「だから、私は身を捧げて、このお方の御意にだけ従って参りたいんです」

と、この答えが欲しいんです。前半の答えは出てきますよ、そうやってくださったのだから、十字架にかかつて私たちの罪を全部取り払って、本来地獄^{ひつじょう}必定の身であったのが、



「ありがとうございます」

と言ったら、もう全部天国へ行けるんでしょ。国籍は天にあるんでしょ。もうちゃんと将来は保証されている。今さら就職活動を、天国の場所取りをしなくてもキリストは、

「ちゃんと、所を備えに行く。所が備え終わったら、また帰ってくる」

と言われた。ヨハネ伝14章に書いてあるでしょ。

「汝ら、心を騒がすな。神を信じ、我を信ぜよ。あなた方のために所を備えに行く。備え終わったらまた帰ってきて、私の居る所にあなた方を一緒に居させてあげるからね」

と。イエスの方から全部やってくださった。全部やってくださった。それをそのまま、「ありがとうございます、地獄必定の身であるこんな人間をあなたはそこまで大事に思ってくださいって」

と。ご自分に何の問題もなかったんですよ。ご自分が十字架にかけられるような理由は何一つない。ユダヤ人の決めた罪の名前は、「神を冒瀆した」ということ。

「父と我とは一つなり。父は私の中で働いておられる。父と私は一つである」と。だから、

「人間の分際で自分を神と等しくした。神を冒瀆する」

というのが一つ。それから、安息日を破られた。安息日にどんな人を癒していかれた。

「安息日は、人を殺すのと生かすのとどちらがいいのか」

と。人を生かすに決まっていますね。神さまは人に生命を与えたもう神。安息日は人が手を休めて神さまの御力を受ける日なんですよ。それをキリストは神さまの身代わりとなつて、神さまの代わりに生命の御業をどんどん安息日になさった。それをユダヤ人は怒ったわけです。だから、

「自分を神と等しくした」

ということと、

「安息日を破った」

という、この二つの罪名です。二つともその罪名は間違いでしょ。でも、キリストはそれを黙ってお受けになって、十字架の上で、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分で何をしているかわからない、わきまえない者たちだから、どうぞ赦してやってください」

と。そんなことを祈れますか、もう私はそれだけでも本当に涙がでる。いつも言うんです、私だったら、そんな連中には「バカッたれ、このバカヤローが。全部地獄へ行け！」と言うのが私ですわ。でもキリストは、

「敵のために祈れ。迫害する者のために祈れ。恩知らずのために祈ってやれ」

「天の父は、その日を悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者



にも正しからぬ者にも降らせ給うなり。……さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」(マタイ5・45〜48)

とキリストは言われた。その通りのことをキリストはなさっている。言行一致している。これにはもうかなわんです。そうでしょ。

●終末性

「あなたにとってキリストは如何なる存在か」ということで、そんなことを叫んでしまいましたけれども、元へ話をちよつと戻しますと、「キリストの福音の基本的性格」ということ。つまり、キリスト教とかキリストの福音というとき、一番大事なのは何かということ。二つの点を私はあげたい。

一つは「終末性」ということ。「明日もまた今日の如くあらん」という、のんびんだらりと限りなく時間が流れて、歴史は続いていくとは、キリストは言っておられない。福音は、「今にも終わりは近い、終末は近い」

という、その迫りの中で語られている。これをぬぎにしたらダメです。ペテロ後書に、「ちつとも終わりは来ないではないかと言う鵜が、いや、一人でも多くの者が悔い改めて救われるために神は終わりの時をひき伸ばしておられる。神さまの前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。とにかく、あなた方は祈り待っておれ」ということが出てきているでしょ。ペテロ後書3章3節から、

「³汝等まず知れ、末の世には嘲る者嘲笑をもて来り、おのが慾に隨いて歩み、⁴かつ言わん『主の来りたもう約束は何処にありや、先祖たちの眠りしのち、万のものの開闢の初と等しくして変わらざるなり』と。」

ちつとも変わっていないじゃないかと。

……⁸愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。⁹主その約束を果たすに遅きは、或人の遅しと思うがごときにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。¹⁰されど主の日は盗人のごとく来らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とそこの中にある工とは焼け尽きん。¹¹斯く此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き行状と敬虔とをもて、¹²神の日の来るを待ち、之を速かにせんことを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。¹³されど我らは神の約束によりて義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ」(ペテロ後書3・3〜13)

新天新地を待望する。その前に天体が焼け崩れるとか酷いことが書いてありますから、ちよつとこのへんは私には理解不可能です。本当にこの地球が無くなってしまうとか、太陽



も無くなってしまうとか、そんなことは私はとても想像ができません。まあこういうふうなことをペテロは書いている。要するに、終末は近い、必ず終わりは来るという、その前提を崩していない。

テモテ書でも書いてます。神さまは一人でも多くの人が救われることを望んでいらつしやるということがテモテ書に書いてます。テモテ前書第2章、

「4 神は凡てすべの人の救われて、真理を悟るに至らんことを欲し給う。5 それ神は唯一ただなり、また神と人との間の中保なかだちも唯一にして、人なるキリスト・イエスは是これなり。6 彼は己こを与えて凡ての人の贖価あがないとなり給えり、時至りて証あかしせらる」
(テモテ前2・4〜6)

それから、テモテ後書第1章7節、

「7 そは神の我らに賜いたるは、臆おそする靈にあらず、能力ちからと愛と謹慎つつしみとの靈なればなり。8 されば汝われらの主の証をなす事と、主の囚人めしうどたる我とを恥とすな、ただ神の能力ちからに随したがいて福音のために我とともに苦難くるしみを忍べ。9 神は我らを救い聖なる召めしをもて召し給えり。是われらの行為おこないに由るにあらず、神の御旨みむねにて創世の前にキリスト・イエスをもて我らに賜いし恩恵めぐみに由るなり。10 この恩恵は今われらの救主すくいぬしキリスト・イエスの現れ給うに因りて顕れたり。彼は死をほろぼし、福音をもて生命と朽ちざる事とを明かにし給えり」(テモテ後1・7〜10)

と。素晴らしいことが書かれています。要するに、まずはすべての人が救われる、それが神の御意であると。

「自分だけ救われたらそれでいい。人はそれぞれ人生観、宗教観があるんだから放つておけばいい」

と。これもひとつの考え方です。でも、我々キリストの聖霊をいただいた人間はじつとじていられない。何とかして隙すきあらば相手の魂をキリストのところへ連れてくるぞと。

隙すきあらば狙ねらっているのは病気ですよね。これだけいろいろな医学やら薬学やらいろんなものが発達しても、あいかわらず病気はだんだん進歩しています。一筋縄でいかんような複合的な病気がいっぱい顕れてくる。それこそ隙すきあらばと狙ねらっているわけです。それでこつちも防護する。御霊で防護していきましょうと。

「御霊で防護したら病気にならん」

と、そんなことは絶対言いません。でも、我々の心構えは、我々の内なるものが御霊で戦おうじゃないかと。エペソ書6章にありますね、

「御霊の剣つるぎをとれ。神の武器よろぎを鍛え」

とか、ああいうのは本当にリアリティに富んでいます。

実に私は驚くけれども、福音書にせよ、使徒たちの手紙にせよ、書かれた時代というの



はいつなんでしょうか。キリストからせいぜい100年か150年か、その位の時代でしょ。それから2000年経っている。古いと思いますか。科学は進歩しました。人間は月へでも火星へでも飛んで行くようなんでいうとんでもない時代です。けれども、魂の世界、霊の次元はキリストのあの時代の次元はもの凄く高い。あそこに到達すれば、もう大したものなんです。

●キリストの中に神の国がある

キリストの福音の基本的性格ということをお話し出して、福音、聖書というものを理解する、心得ておくべき前提ということ、一つは「終末性」ということ。つまり、終末の迫りの中で神の国の告知がなされた。キリストの福音にせよ、それが

「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」

ということ。何が「神の国」かということ、キリストご自身が神の国なんです。キリストの中に神の国がある。

「その私を受けとれ」

ということなんです。時は満ちた。神の国は近づいた。だから、翻つてということ。今まで他の変な方向に向いていた。いろんなものを追いかけていた。

「そうじゃないよ。私に直じかにぶつかってこい。私は神の国だ、永遠の生命だ」

と。ヨハネ伝では、

「我をくらえ、我を飲め」

と仰つた。私を食べると。そういう、本当に「一つとなれ」ということ。キリストは神さまと一つです。今度は、

「お前たちは私と一つになれよ」

「いえ、なれません」

「ああ、なれないのはわかってる。だから十字架で、『なれない』というお前の罪や背きや不信仰を全部十字架で片づけたんだ。十字架で片づいているそこを通つて来い」

「はい。ありがとうございます」

「平伏して通つて来い」

と。

「我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても我によらでは父の御許に到るこ

となし」

とちやんと言っておられるでしょ。そんな大手を振って偉そうな顔して行けないですよ。

「本当にありがとうございます。こんな煮ても焼いても食えんどうしようもないやつをあなたはご自分の生命と引き替えに私にあなたの生命をくださる。こんなありがたいことがありますでしょうか」



と。本当に皆さん、そのように思っているらっしゃいますか。

「あなたは私を誰と言うか？」

と。それに対して、

「神の子です。何々です」

という答えではなくて、

「はい、私にとってあなたは命の恩人です。あなたがいらつしやらなければ、私は生きていません」

と。太陽がなかったら、人間は生きていられない。人類は生きていられません。水も空気も太陽も大地も、こういう天も地も空気も光も太陽も水も、こういった自然の恵みの中で人は生かされています。我々の霊というのは、キリストの霊気をいただいて、キリストの霊の生命をいただいて、初めて我々は生きるんです。

「外なる人は破るれど、内なる人は日毎ひごとに新たなり」

とコリント書にあるでしょ。「外なる人は破るれど」、これは誰でもわかります。歳とって破れない人はありませんよね。でも、

「内なる人はいかがですか？ 内なる人は皆さんいかがですか？」

「燃えに燃えています、生命いのちに。キリストの生命が宿りました。キリストの生命が私を燃やしてしようがないんです」

と、そのくらいに、皆さん、本当に人の前でハッキリ告白してくださいよ。

「まだそこまでの境地に達していないから告白できません」

それではいかんのです。うそでもかまわない、告白しなさい。そしたらキリストが、「そうだよ、お前の言った通りだ。私はお前を担保するから、保証人になるから」

と。そうなんですよ。なにも「でまかせでいい」とは言いませんけれども、やはり、

「人々の前で私を告白するなら、私も天使たちの前であなた方を受けいれる。」

人々の前で告白しないなら、私は知らんと言うよ」

とちゃんと書いてあります。皆さん、本気で人々の前に告白していますか。

「私を生かしてくれているのはキリストなんです」

と。ランニングやっているから身体が丈夫だと、そんな面もあるかもしれないけれども、

「それは外なる人です。内なる人はキリストなんです」

と、私は平気で言ってますよ、どこでも。皆さんにそれをやって欲しいんです。

●伝道の使命と実践

今回のこのプログラムの一番最後の第4回集会の題を見てください。

「伝道（証し）宣教の使命と実践」

としました。これがなかったら、御霊のクリスチャンではない。身勝手なクリスチャンに



すぎません。本当の御霊のクリスチャンなら、この「伝道(証し)宣教の使命と実践」ということ。キリストが燃えておられるから、キリストが呻いておられるから、その呻きを受けとって、我々はキリストの僕として、婢女として、キリストの生命を捧げていく。これが我々の生き方ではありませんか。

なにも伝道ばかりやるのではない。それぞれ職業を賜っている。それぞれが生活の場がある。なにも専従的な牧師、宣教師ではない。私もそうでしょ。ずっとこの世の職業を荷ってきて、そしてかたわら日曜日は集会をやるという、それを何十年も貫いてきたわけです。これは並大抵ではなかったですよ、正直いまして。でもそれを貫かしていただけた。生命をいただいたら、生命をもってお応えするしかないんじゃないですか。

「先生、脅迫するんですか」

なんて(笑)。いや、パウロもコリント書で言ってますよ、

「キリストの愛、我に迫れり。黙っておられない。どんなことでも福音のためにはやる。這いつくばれと言われたら、這いつくばるよ」

というような内容を言ってます。

「強い人には強い人のようになる。弱い人には弱い人になる。」

それこそ「水は方円に従いて」というふうに、

相手の姿に自分もなりきって、いかにもしてその人を救いあげたい」

と。そういうパウロの言葉が自分の生活の中にしみ込んで、それがいつも活き活きと生きていかなかったら、聖書を読んでないですよ。私はこの頃いつも集会で言うんです。

「いろんな本を読まなくていい。もう皆さんは年寄りだから、今まで充分読んできたはずだ。若い人にはたくさん読めと言います。でも、もう皆さんは、要らん。

聖書を身読して体の一部にして、私を切ったら御言が飛び出すぞ、聖書が飛び出すぞと、そのくらいの気魄をもってほしい」

と、私は集会で申し上げている。そういうことを言うと、

「そうだった!」

と言って誰も叫ばない。うちの集会の人は皆さん、おとなしいですわ。

「先生みたいに河内の柄のわるいのと育ちが違いますからね」

と、そこまで邪推はしませんけれども(笑)。

でも、本当に小池先生もそうでしょ。叫んでおられたですよ。

「福音を語りながらぶつ仆れたい」

と先生は言っておられた。生命をいただいたからには生命をもってお応えする。これが我々、少なくとも日本人はそういうふうな生き方を先祖から学んできたはずなんです。そうじゃありませんか。

まあ要するに、



「あなたにとってキリストは如何なる存在か」

というのはそこなんですわ。「恋人中の恋人」とべつに言っても言わんでもいいですけども、とにかく生命をくださった。讚美歌332番にありますね、

「主はいのちを あたえませり、

主は血しおを ながしませり。

その死によりてぞ われは生きぬ、

われ何をなして 主にむくいし」

これを本当に日々の生活の中で身体の中からこの思い、この言葉をキリストに捧げてほしい。

「主はいのちをあたえませり、主は血しおをながしませり。その死によりてぞわれ

は生きぬ、

それ以外ではありません。その死によりてぞ我は生きんと。さあ、

われ何をなして主にむくいし」

と。今からでも遅くない。自分のために生きるなんてことはもう考えない。

「主さま、あなたに余生を献げます」

と。そしたら主は喜ばれますよ。そう言っている人間を放っておきはしませんよ、主さまは。そうでしょ。もしも子どもがそんなことを言ってくれたら、親はもう涙ながして喜ぶよな。

「こいつを絶対まもるぞ、命懸けで守るぞ」

と。私は親としてはそう思いますね、もし子どもがそんなことを言ってくれたら。飛び上がるほどうれしいよな。

「主は御父の もとをはなれ、

わびしき世に 住みたまえり。

かくもわがために さかえをすつ、

栄光を捨ててくださった。ピリピ書2章に出てきます。

われは主のために なにをすてし」

「主はゆるしと いつくしみと、

すくいをもて くだりませり」

そうなんですよ。本来、天にいらつしやつたお方、天の次元、神さまのもとにいらつしやつた幸せなお方が、わざわざ人となって地に降つてこられたんです。神の次元が地の次元に顕れたんですよ。本来、絶縁状態なんです。天の次元、神の次元と、この地の次元は働く原理が全くちがう。神さまの方の愛はアガペーの愛です、永遠の生命の世界でしょ。この人間界はドロドロしていて、エゴイストばかりがおつて、人から取ることばかり考えて、「君のものは僕のもの、僕のもの僕のもの」

と。そんなふうなエゴと、そういう欲望が渦巻いている、そういう地に住み給うたんですよ、



聖らかなお方が。それだけでも息苦しかったでしょうに。

それで福音書に出てくるあの姿、パリサイ人やら宗教家たちからは弾劾されながら、貧しき人、病める人、それこそ爪弾きつまはじされている者たち、取税人や遊女、そういう人たちといつも一緒に居られた。

「健やかなる者は医者を要せず、病める者のみこれを要す。我は、健やかなる者、正しき者を招かんとあらず、病ある者を招かんとしてやって来た。罪ある者を招かんとしてやって来た」

と。いつたいキリストの前に義ただしいといえる人間がおるか。

「義人なし、一人だになし」

とパウロは言いました。まず自分が神の前に本当に罪深い、どうしようもないエゴイストですと。それを本当に自覚する。そんな自分のために聖なるお方が、御意だけを求めていかれた義人がある。「義人」というのは、御意だけに生き抜くというのが義人なんですよ、なにか正しいことをやったとかやらんとか、そういう結果の問題ではない。その人の生き方が神の御意だけに自分を捧げて生きるという生き方。それが「義」なんです。「義人なし、一人だになし」というのは、人間というのは神さまよりも自分の方が大事なんですよ。

「自分を幸せにする神さまなら信じる。そうでない神さまはいらん」というのが人間の罪深きなんです。キリストは逆です。

「父よ、あなたがすべてです」

と。「父よ」と言われた。「神さま」なんて言われない。「父よ」というのは、それに対するのは「子ども」でしょ。父と子という愛の関係です。愛の関係でベツタリしているかという、そうではない。

「主よ、僕イエスを」

と。主に対して僕ということ、主の御意だけを求めていく生き方、これが義なんです。義だけだったら冷たい。そこに「父よ」という愛の関係が成り立っている。義であり愛である、それがキリストの生き方。その義を捨てて、十字架にかかってくださって、

「義はお前にやるよ」

と。よく、

「信仰によって義とされる」

と言いますね。十字架によって義とされたんです。あの「信仰」なんていう言葉は使わない方がいい。十字架という事実をもって私たちを神は受け入れてくださった。それを「はい」と言うのが、「信仰」といつているだけです。不信者から見たら、

『はい』と言っている不思議なやつだ」

と。それを「信仰」と言葉で呼んでいるだけで、「信仰」なんていう言葉は使わない方がいい。恵みを「はい」と言つて受けとる。雨が上から降ってきた。それをいただく。太陽が照ら



してくれている。それをいただく。何でもみないただくわけでしょ。そういう恵みをいただく。我々は生きていくわけですから。

「主はゆるしと いくくしみと、

すくいをもて くだりませり。

ゆたけきたまもの 身にぞあまる、

ただ身とたまをと 献げまつらん」

本当にキリストの有り難さがわかっていたら、この通りせざるを得ない。クリスチャンでそういう心境にならないというのは、本当に救いを受けとってないからです。本当に救いの十字架の有り難さがわかってない。だから、中途半端な生き方しかできない。

「熱いか冷たいかのどちらかであってほしい。中途半端なのはいやだ」

とキリストは言われた。黙示録にあります。烈しいんですよ、福音というのは。そのくらいキリストは人々を救いあげたい、本ものにしたいたいという熱烈な愛が炎となつて燃えている。しかも、その炎を直接植え付けることができなかつたんです、生きておられる間は。

● 我は火を地に投ぜんとて来たれり

ルカ伝12章49節に、

「我は火を地に投ぜんとて来たれり。この火既に燃えたらんには我また何をか

望まん。

この火が既に燃えていてくれたらなあ、そしたら、私はもう望むところはないんだよと。

されど我には受くべき(血の)バプテスマあり。

「バプテスマ」の前に「血の」という言葉を補いたい。十字架の血潮。本当にこの火が、聖霊の火が燃えるには、聖霊が宿るには、私は十字架、血のバプテスマをくぐり抜けなければならぬ。それが実現するまでは、

その成しとげられるまでは思い迫ることいかばかりぞや」

と。キリストは直接、聖霊を与えたい。与えたくてしょうがない。けれども、一般民衆はもちろんのこと、直弟子たちも全然受けていないんです。一時的には、霊能力をいただきましたよ、伝道もやりましたよ。でも、全存在的に聖霊がその人の全人格を変えてしまうような、そういう大転換はペンテコステによつて初めて成就したわけですよ。十字架、ご復活、それから四十日ほど地上に居られてから、天に昇られて、

「お前たち、祈っておれ」

と。そして十日たった五旬節の時に聖霊が火の如く降^{くだ}つてきた。そこから始まったわけですね、使徒行伝のあの素晴らしい伝道は。もうキリストが乗り移つて、ああいう御業をなさつて行った。

「我は火を地に投ぜんとて来たれり。この火が既に燃えていてくれたらなあ。



これが私の願いなんだ。しかし、その前に私は血のバプテスマ、十字架を突破しなければいけない。それが実現するまでは思い迫ることいかばかりぞや。……われ地に平和を与えんために来る^{きた}と思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、^{かえ}反つて^{ぶんそう}分争なり」

と。家族の中に、あるいは家庭の中に、一人クリスチャンが生まれまると、そこに争いが起こる。必ず家族で反対するのが出てくる。賛成派と反対派が必ず起こります。始めからクリスチャンファミリーでそういうのが代々来ていけばそういうことは起こらないでしょうけれども、そうでない普通の日本家庭でキリスト教と関係ないところで育つた人間がクリスチャンになって、クリスチャン宣言をしますと、必ずそこで波紋が起こる。穏やかにすめばいい方ですよ。ヨハネ伝で、

「私のためにみんな憎まれる。わが名のために憎まれる」

とキリストは言われた。ああいう言葉は本当ですから。

「クリスチャンは、地上的にいいことばかりある」

なんてことは絶対にありません。この世はキリストに逆らっている世ですから。キリストに逆らう霊力が働いているところで、一人本当のクリスチャンが出てきたら、よつてたかつて叩きつぶそうとする。これは当然のことではないですか。それを恐れていたらダメなんです。

まあ非常に今日は、私は烈しいことばっかり言ってますね。もうきつと向こうへ行くのが近いかもしれません(笑)。これは遺言なんですよ、本当に。終末というのはそういうこと。来年あるかどうかわかりませんよ、この集会だつてね。それくらいの気持ちでこの集会に私は臨んでいただきたかった。皆さん、きつとそうだと思えますけれども。

「まあどうせ来年あるんだから、今年はちよつと忙しいからやめておくわ」
なんて、これは絶対ダメです。

「明日があると思うな」

と、それが「終末の迫りの中で」ということに対する我々のアンサー、答えなんです。それを行動で表さないといけない。

非難命令が出たら——非難勧告ではない——非難指示が出たら、やはりみな逃げますよね、「高台へ行つてください」と言われたら。なぜなんですか。命が大事だから。キリストは福音書で、使徒たちは手紙で、非難命令を出してくれているんです。

「今にも終わりがくる。大審判がある。えらいことになる。あなたは大丈夫か、聖霊の火を持っているか？」

と。それが「終末の迫りの中で」と私が強調するゆえんなんです。

「今日も明日も、向こう何年も何百年も何千年も、今のよういきみますよ。まあ、のんびりいきましようや」



と、そんなことを許さないのが福音なんです。
「でも、ちつとも来ないじゃないか。開闢かいびやく以来、変わってないじゃないか」と、それに対してペテロは、

「いや、一人でも多くの人が悔い改めるように待ってくださっているんだ」と、言い訳している。どれが本当か、そんなこと私は知りませんよ。でも、福音というものの性格は、「まあ明日があるから明日でいいや」ということを許さない。非常に切羽詰まった、そういう告知なんです。

「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。私という福音体が出て来たではないか」

と。たった三年間しか居られなかったんですものね、地上の伝道は。しかもその三年の間、キリストと一緒に生活した者たちも全然ダメだった。最後はみな捨てて逃げたでしょ。聖霊が降ってきて初めて本ものになった。そういうことが全部さっきの、

「我は受くべきバプテスマあり」
と、あそこに表れていると思う。

●聖霊の熱血漢

私は自分が一人で生活しているせいかも知りませんが、なにかものすごく、福音書とかキリストの言葉とかパウロその他の言葉がもの凄く迫ってくるんです。その中で生きていく感じがする。皆さんも、そういう受けとり方をこの聖書でやってほしい。

「聖書は一日何頁読まねばなりませんか」
と、そんなんじゃないですよ。日毎に新たに、

「我をくらい、我を飲め」
と言われたでしょ。

「我と汝は一つなり」
と。それくらい向こうは迫ってきておられる。そのキリストの迫りというものをしっかりと受けて、

「はいー！ 主さま」
と言う。昔は

「男と男の約束だ」

なんて言ったんですけれども、今は言いません。男だ女だなんてことは言わない方がいい。人間と人間で結構なんです。魂と魂、霊と霊、それが火花する。それがこの福音の世界なんです。だから、福音にふれて本当に燃え上がって、熱血漢になるのが、私は自然だと思う。

夏の甲子園に行つてごらん。あの熱血漢。選手だけではない。スタンドもみんな応援団も燃えに燃えているでしょ、あのだ暑いなかで。しかも応援団長なんて黒の服を着て太鼓



を叩いて、あんなんでもよくぶつ倒れないなと思う。応援団の旗を持ってやっているやつだって、あれは風で揺れたら大変な重さだと思う。それをやっているでしょ。誰が頼んだのですかね。やらざるを得ない。「ざるを得ない」というので、あれはやってる。私はそう思う。ああいう甲子園の高校球児の姿を見てたら、

「我々は福音にあれ以上に燃えないでおれようか」と、そういうように思いませんか。

「彼らだってあのくらい燃えている。我々は福音にあれ以上に燃えないで、キリストは嘆かれるのではないか」

と。そのくらいの気魄きはくを皆さんの生活の中に持ってほしいんです。日頃、おとなしくていい。けれども、一皮むけたら、

「おお、ちよつと待って、待って！」

という、そのくらいの本当の権威、聖霊の権威、それを身に帯びているのがクリスチャンです。

「御霊なき者はキリスト者にあらず」

と、ローマ書にあります。キリストは、それ以下では放っておかれない。中途半端は要らんと、「オール・オア・ナッシング」(All or Nothing 全か無か)、「0か100か」と。

「マイナス99のお前でもいい。プラス1をやる。このプラス1はマイナス99なんて問題にしない。質が違うんだ」

と。そうやってキリストは叫んでくださる。

「芥子種からしだね一粒の信」

と言われた。福音というのはそういう質なんです。だから、それを本当に皆さんが実生活の中で——山の中に籠もり祈ってではない——実生活の中でいろいろ苦労しながら、涙しながら躓すいていく。また、いろいろ腹を立てながら——誰に？ 何でもいいですよ、本気で怒ればいい——中途半端がよくないのではないですか。

やはり、福音は熱血漢なんです。キリストの霊が燃えてくると、熱血漢たらざるを得ない。パウロは熱血漢ですよ。青年は青年なりの喜びも熱血性もいろいろあります。でもそれとまた違う、次元の違う、霊的な熱血性、それを私は言いたいんです。

「外なる人は破るれども、内なる人は日々に新たなり」

と。外なる人は見える。内なる人は見えない。しかし、内なる人は日々に新たに、日毎に御霊の生命をいただいて、

「わが生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり」

と。ピリピ書に書いてます。要するに、神の栄光のためにだけ生きている。

「この身を通して、あなたの栄光が顕れますように。それだけが願いです」

と、そういう生き方に徹底してほしい。それはそれぞれの職業で、学者は学者らしく、そ



の他実業家は実業家らしく、それぞれのところで精いっぱいやっていただければ、そこに栄光が顕れる。それを否定するのではない。そういうものに黙々といそしみながら、しかし、いちばん根底においてはこの福音の生命、キリストの生命、これが支えている。これが原動力であると、そういう生き方をしていく。

いや、私がこんなことを申し上げる資格は本当はないかもしれない。というのは、私は祈りのない人間だから。「何時間も祈りました」とか、そういうのを聞くとうらやましい。私は祈りのたねなんかすぐ無くなってしまう(笑)。「5時間聖書を読め」と言われたら、読めますよ。でも、「5時間祈り続ける」と言われたら、御免蒙りますわというのが私なんです。だから、祈り深いなんてことはとても自分のことはいえない。でも、こんな人間でも、キリストはうちに燃えてくださって、

「お前を使って、人々に福音を証しさせるから、お前は心配するな。今のままでつ

いていい」

「はい、ありがとうございます」

と。そういう関係なんです、私とキリストは。それぞれ皆さん、キリストさまとそういう契り^{ちぎ}を結んでください。

「あなたにとってキリストはどんなお方ですか？」

「はい、私にとってキリストはこういうお方です」

と。ご自分がそれぞれ答えを用意して、それを本当は今日持つてきてほしかったんだけど。来年、一年たつて、「こうでした」と輝いて来年来てください。私は天にのぼっているかもしれないけれども。明日のことはわからない。地上の命が何年あるかではない。日々、本当にキリストがうちにあつて生きてくださる。キリストの生命を生きる。

「朝^{あした}に道を聞かば夕^{ゆうぐ}に死すとも可なり」

と、あの言葉に私は本当にあこがれた。

「本当の生き方ができたというその瞬間を味わえたら、もうそれ以上は要らん」

と、私は正直思いました。うしろを振りかえれば後悔ばかり。将来をのぞきみたら不安ばかり。現在は後悔と不安の間にサンドイッチになってペッチャンコ。全然、生命がない。それが本当に辛かった。朝起きるのが辛かった。ひきこもりです。仕方がないから、大学へ行きましたよ、研究室へ。でも、足どりは重い。

ある八卦見^{はっけみ}が小さな行灯^{あんどん}をともし薄暗い所にいた。ちよつとそこへ立ち寄つたら、

「手を見せてごらん。あなた、二週間、こういう生活をしてきなさい。二週間たつ

たら、またお見せなさい」

と言う。そして二週間たつて、またいろいろ言う。そこで私は思った。私は手相見によつて人生が決められるのか、私の人生を決めるのはこの手相見のおっさんなのか。そんなものいやだ。そのことをI君に言つたら、彼は、



「手相見なんか絶対御法度。聖書はそんな占とかいうものは禁じています」と、ハッキリ言ってくれた。ああよかったと。本当に私は二週間、手相見によって、「こういう生き方をやればあなたはこうなる。そうでなかったら、あんたはこんな不幸になる」

なんて言われて、手相見に私はコントロールされたらたまるかと思った。あんまりさえない風采のおつちゃんに私の人生がコントロールされてたまるかと、むらむらと反抗心が起こってきた時にI君に相談して、「絶対ご法度だよ」と言われた。それから、もう一切関わりをもたなくなつた(笑)。皆さんどうですか。人間というのはやはり弱い時には何かにすがりたくなるでしょ。まあそんなのが私の過去でした。

● 霊性

福音の基本的性格ということで、お話ししたかった一つは、「終末性」ということ。終末、世の終わりが近い。それからもう一つ大事なものは、「霊性」ということ。霊。この世の次元は「肉」なんです。聖書でいう肉、見える世界、物質界。聖書の世界は「霊」、神の次元なんです。神の次元は本来つかめない。認識もできない。勝手に想像はしますよ。でも、本当は誰もわからない。それがわかっていた方はただ一人、イエスというお方だけ。イエスというお方はその世界から地上に来てくださったのだもの。神さまの絶対次元の永遠界からこの相対次元の我々の肉の世界、地の世界へ来てくださった。これがクリスマスの恵みでしょ。生命を携えて来てくださった。

我々地上の人間というのは、120歳を越えて生きてきた人はまだいないでしょ。今、最高齢は116歳位かな。必ず120で終わりです。そして土に還るんですよ。土から出て土へ還る。これは自然法則です。

「自然法則のままに生きなさい。それ以上ゴチャゴチャ願うのはわがままだ。あきらめなさい」

と。これが諦めの哲学、仏教でしょ。あきらめなさいと。あきらかにみる。

「人生とはこんなものだとはっきり認識しなさい。それ以上余計なことを思いなさんな。そんな余計なことを思うのは僭越だ。自分の分にあまみじて、生まれてきて死ぬ。それでいいじゃないか」

と。それに対してキリストは、

「とんでもない。死をぶつとばして本当の生命を私は携えて降ってきたんだ」

と。くだってきたんです。「くだらんやつ」なんて言ったらあかん。くだってくる。くだるやつなんです。

天の次元、永遠の生命の次元、その栄光の御座を捨てて、人の姿をとって地に宿ってくださった。姿かたちは人間と同じだけれども、中味は霊の次元、神の次元です。だから、



いろんなことが起こったでしょ。不思議な御業は当然なんですよ、天の次元を持ってきておられるんだから。それを地の次元で判断するからおかしなことになる。

「そんなのは全部うそだ」

と、神学者だとかは言う。

「うそだと言うが、あんたはその時居らんだろ」

と私は言いたい。天の次元、永遠の次元、それを引っさげて、地の次元にくだつてきた。しかも父の御意に従つてくたつてこられた。キリストはヨハネ伝で自分を語るとき必ず、

「私を遣わしたもうた父」

と言つて、

「自分一人でのこの世に来たのではない。しかもその父の御意は、私を信ずる者が永遠の生命をもらうこと。終わりの時に甦る、それが父の御意だ。私に來る者は誰も拒まない」

と、キリストは言つておられる。ヨハネ伝は本当にありがたいところですよ。ヨハネ伝を本当に受けとろうとおもつたら、天の次元で書かれた書だということ。天の次元がこの地の次元に展開して行つているから、それは波長が合わないかもしれない。でも、天の次元をいただいで読めば、

「なるほどありがとうございます、本当に素晴らしいです。アーメン、アーメン」と言わなければうそですよ。

「人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない」

とキリストは言われた。ヨハネ伝6章63節。人を活かすものは霊であつて肉ではない。霊というのは神の次元。肉というのはこの世の次元、物質界です。

「わが語りし言は霊なり生命なり」

と。言は言葉ではない。それを食べると、

「我をくらえ、我を飲め。私と一つになれ」

と。ヨハネ伝6章で繰り返し言われている。始めパンの奇蹟が出てきます。それから、

「我は生命のパンなり。モーセは天からのパンを与えたようだけれども、あの

モーセのパンをもらったつてみな死んだではないか。私というパンを食べて

みよ。死なないよ」

と繰り返し6章で書かれています。

「こんな言葉は聞いておられん」

と、みな去つて行つた。弟子たちにも去るやつが出てきた。ペテロに、

「お前も去ろうとするのか?」

「いえ、とんでもありません。あなたこそ神の御言、神の証者です」

と言つて、ペテロは止まりました。ああいうヨハネ伝というのは、その天の次元、霊の次元



神の次元で書かれていますから、その次元に自分の身をおかないと、肉の次元で受けとろうとしたって受けとれない。皆さん、本当にそういうふう読んでくださいね。

「余計な小説なんか読まなくていい」

と、私が言いたいのはそれなんです。本当にこの新約聖書それに詩篇は、私にとっては宝物です。これをなんとか、

「私は聖書です」

というくらいに読んでほしい。パウロは、

「あなた方はキリストの書だ。また香りだ」

と言いました。小池先生も、

「聖書だけは持つていきたいけれども、聖書も天へ持つていけない」

と言われました。ということは、

「自分自身が聖書になる。自分自身が神の言と一つになる。それ以外にない」

と言われた。

「小池は、信じてなんかいません。圧倒されています」

と、それが先生晩年の言葉でしたね。「私は信じてなんかいません、圧倒されています」と。

「信じる」というのはまだ、こつちがあつて、向こうがあつてという、そんな関係のように思う。「圧倒されています」というのは、

「もうぶつ倒されている。信じるもへちまもない。しみ込んでしまっています」

という告白を先生の晩年に私は何度も聞かされました。私はまだ先生の歳には至ってませ

んけれども、そういうふう先生が告白せざるを得なかったということが、ものすごく私

にはなにか親近感をもつて受けとれるんです。もう少し先生の言葉を紹介しますと、

「聖書は驚嘆驚倒して読むべき書なり」

と。驚嘆驚倒、「ギョギョッ」と(笑)、驚いて、「こんなのあり? こんなもの!」と。

「驚いてぶつ倒れて、初めて聖書はその人のものになる。解る解らないなんていう

次元ではない」

と小池先生は言われた。それから、

「キリストに降参するまでは絶対、聖書の扉は開かれせんよ」

と言われた。だから、知的文化人は全部ダメ。頭でしか理解しないから。

「本当にキリストの前に降参しろ。そうしたら、扉が開かれる。十字架の門をくぐ

り抜けて行く。そうすると、そこは緑の牧場、憩いの汀、素晴らしい緑野が広が

っている」

と。そういうことを言われました。



●主は私にこれを望んでおられる

お配りしてある講筵レジュメの序のところ、

「Ⅰ 序 全回を貫き前提となるもの

1 終末の迫りの中で!

イエスの福音宣教の第一声は、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」であった(マルコ1・15)。この前提を外しては、イエスの言・行の重さ、深さを理解することは出来ない。

2 (1) 「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」(ヨハネ4・24)。

(2) 「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、
霊なり、生命なり」(ヨハネ6・63)。

(3) 「誰でも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」。「神の国に入ることはできない」。

「新しく」とは、「上から」とも訳せるそうです。上から、天から。

「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」(ヨハネ3・3〜7)

関連箇所：ヨハネ3・31〜36、ピリピ3・20〜21、コロサイ3・1〜4
それから今日の第1回集会。

Ⅱ 第1回集会(8月24日夜)

あなたは、私(イエス・キリスト)を誰と言うか?

あなたにとって、私は如何なる存在か、どこに接点があるか?》

ということは、私にとって、

「主は私に何をしてくださったか。主は私に何を考えになっていらつしやるか。

私のことをどう受けとっておられるか」

と。私がどう思うかではない。主はどうかと。主が大事なんです。この観点を絶対に譲らないでください。多くの人は「自分がこう思う」と、自分から出発して証言なさる。

「自分はこうしてイエスさまに出会いました」

と。それは出会う時はそうかもしれない。でも、出会ってからのちは、

「主は私にこれを望んでおられる。だから、このように私は歩んできました」

と。常に主が第一でないと、私は承知できないんです。ここにちよつと関連の言葉をあげました。どこに接点があるか。

「我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし」(ヨハネ13・8)

キリストがペテロの足を洗う。それで初めてキリストとペテロとの関係が成り立ったんです。それから、

「我は生命のパンなり。我に来る者は飢えず、我を信する者は、何時までも渴くこと無し」(ヨハネ6・35)



「天より降るパンは、食う者をして死ぬる事ならしむるなり。我は天より降りし活けるパンなり。人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり、世の生命のために之を与えん」(ヨハネ6・50〜51)。

「我は葡萄樹、汝らは枝なり。汝ら、我に居り、我、汝らに居らば、多くの実を結ぶべし。……汝ら我を選びしに非ず、我、汝らを選べり。……父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを選べり。わが愛に居れ」(ヨハネ15章より)

これは全部、キリストが主体でしょ。キリストからこう仰っている。「私がこう思う」のではない。キリストがこのように仰つてくださっている。「はいっ、それをいただきます」と。そこに注目していただきたい。それから、次はイザヤ書です。

「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残つたすべての者よ、生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出た時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。わたしは、あなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造つたゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ46・3〜4)

「まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみを担つた。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神に叩かれ、苦しめられたのだと。しかし彼は、われわれの咎のために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によつて、われわれは癒されたのだ。われわれは皆、羊のように迷つて、おのおの自分の道に向かつて行つた。主は、われわれ全ての者の不義を、彼の上に置かれた。彼は虐げられ、苦しめられたけれども、口を開かなかつた。屠り場に引かれて行く子羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかつた。彼は暴虐な裁きによつて取り去られた。その代りの人のうち、だれが思ったであろうか、彼は我が民の咎のために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと」(イザヤ53)

「十字架の言は、亡ぶる者には愚なれど、救わるる我らには、神の力なり。神の愚は、人よりも智く、神の弱きは、人よりも強ければなり」(コリント前1・18、1・25)

「我、キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるに非ず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今、我、肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を棄て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、

「律法に由らば」ということは今ふうというと、「自分から発生するならば、自分に根拠があるならば」ということ。自分の善行、自分の信仰、自分の何々という、自分に根拠がある



ならば、

キリストの死に給えるは徒然なり」(ガラテヤ2・20、21)

自分の方には全く根拠がない。キリストがすべて為すべきことを全部やりとげてくださった。それを「はい、ありがとうございます」と、いただくのみ。

「あなたがたは、キリストとともに甦らされたのだから、上に在るものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは、上に在るものを思うべきであって、地上のものに心惹かれてはならない。あなたがたは既に死んだ者であって、

あなたは既に死んだ者、十字架で死んでいるんだと。

あなたがたの生命は、キリストと共に神のうちに隠されているのである。わたしたちの生命なるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう」(コロサイ3・1、4)

全部、アーメンです。

それでは、これで今日の第1回の集会を終わることにいたします。では、終わりのお祈りをひとことお祈りします。

● 祈り

主さま、この特別集会をあなたはお備えくださいました。お一人お一人は万難を排してここに集って来られました。そのように集わしめる拠り所は、主さま、あなたご自身の迫りであります。

主さま、人はそれぞれ自分で自分の計画を立てますが、どうぞ、その奥にいつもあなたがいらつしやって、我々の思いがいつもあなたの御思いに合致しますように、またあなたの御思いが私たちの思いを動かしてくださいるように、主さまが第一であって、

「主よ、語り給え。しもべ聴く」

と、あなたの御意第一に、どうぞ、我々の人生をお導きくださるように、希いたてまつります。そのためには絶えず十字架に焦点を合わせて、十字架で主さまにお逢いし、十字架で主さまがこの身に宿ってください、御霊の主さまが宿ってください、そのような在り方で貫きたくございます。

多くの人が救われなければなりません。主さま、あなたは呻いておられます。どうか、お一人お一人がキリストと一つにされて、あなたのご本願、あなたの救いの聖なる御意を荷って働く者としてください。第1回の集会をあなたが豊かに導いてくださったことを感謝し、讚美と祈り、兄弟姉妹のそれと共に、イエス・キリストさま、あなたの尊い御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。

